別紙２

令和４年度大学コンソーシアムとちぎ　学生活動支援事業　報告書

機　関　名	宇都宮大学
団 体 等 名	ほんわか里山物語♪～おおぎす自然体験村～
学生代表者氏名 （所属・学年）	高橋　日菜子（宇都宮大学農学部一年）
責任教職員氏名	西尾 孝佳（宇都宮大学農学部准教授）

１．事業名	宇大生による「おおぎす自然体験村プロジェクト」
２．実施時期	令和三年四月～令和五年二月
３．実施場所	栃木県那須烏山市大木須
４．事業の内容等	二年前から、栃木県那須烏山市大木須地域において、大学生が主体となって大木須の地域振興を目指して様々な活動を行ってきた。当該地域には、日本の原風景とも言える里山的な景観が広がっており、豊かな自然や貴重な伝統工芸が受け継がれている。しかし、その一方で高齢化や過疎化、鳥獣害、雑草問題など、多くの課題も抱えている。そのためこのサークルでは、これらの課題を解決するために、大木須地域の魅力を整備・発信をして多くの人に大木須を知ってもらい、地域に人やお金が集まる仕組みを作るための活動を行っている。このような魅力の整備・発信を続け、最終的にはこれらを取りまとめ、大木須地域全体を里山の豊かな自然や伝統工芸が体験できる「里山テーマパーク」のような形にまとめ上げたいと考えている。この最終目標を目指し、地域の方たちと協力をしながら、以下のような取り組みを進めてきた。 ① 地域の景観と魅力を向上するためのビオトープ作り →大木須地域は水が豊富な中山間地に位置し、以前から季節になると蛍が多く発生することで有名だった。そのためこのサークルでは、蛍による地域おこしを目指して地域に蛍が生息しやすいビオトープを整備する活動をしてきた。具体的には、高齢化によって地元住民だけでは出来なくなってしまった池の泥かきを手伝ったり、蛍が生息しやすい環境を整えるために水路沿いに草木の植栽を行ったりしてきた。今後は出来上がったビオトープを利用して、子供向けの自然観察会なども行ない、地域に利益をもたらしたいと考えている。 ② 地元の祭り「ほたるの夕べ」の復活 →大木須では毎年、蛍の時期に地域を挙げての祭りが行われていたが、高齢化やコロナ禍の影響で、ここ数年はこの祭りを開催することが困難になっていた。しかし、このような地域活動は地元住民同士の密接な関係や地元の活気を維持する上で、とても大切である。そのためサークルでは昨年度、「ほたるの夕べ」の復活を地元住民に呼びかけ、小規模ながらもコロナ禍の時代に合った新しい形の「ほたるの夕べ」の開催を大

	学生と地域の協力で実現した。昨年度に続き今年度も「ほたるの夕べ」を開催した。祭りの中では、地域で増えすぎて困っている外来の孟宗竹を利用した竹灯りのライトアップなどを行い、学生のアイデアで地域を盛り上げることに成功した。 ③ そば収穫・脱穀作業の手伝い →大木須地域では昔からそばが有名であり、現在も地域で伝統的に受け継がれてきたそばの生産が行われている。しかし、高齢化の影響もあり収穫や脱穀などの農作業は年年厳しくなっている。そのためこのサークルでは、昨年度からサークルメンバー総出で大木須のそばの収穫と脱穀の手伝いを行っている。 ④ 蜜源植物の植栽・蜂蜜の販売 →大木須では地域おこしのため、地域を挙げての養蜂業が行われている。養蜂業の成功のためには蜜源となる花々の存在が不可欠だが、地域には特に夏場の花が少なく、これが大きな課題となっている。そのためこのサークルでは、地域の方たちを手助けし、夏場の蜜源となるアニスヒソップなどの花の種まきや植え付けを行ってきた。また、蜜源植物の確保のかいあって採れた蜂蜜を、宇都宮大学の学園祭で販売し、大木須に関心を持たせることができた。 ⑤ 蜜蝋を生かした製品の開発・販売 →前項で述べたように大木須では養蜂が営まれているが、その副産物として、蜂の巣から蜜蝋という蝋が採れる。蜜蝋には、ろうそくとしての用途のほか、保湿性が高い性質を生かしたハンドクリームとしての用途や、温めると柔らかくなる性質を用いた蜜蝋ラップとしての用途など、多様な使い道がある。そのような魅力的な資源の活用方法を模索し、商品を販売・ノウハウを蓄積するという形で大木須へ還元するという狙いがある。本年度は、宇都宮大学の学園祭で蜜蝋キャンドルを販売し、大学生やその家族、大学近隣の住民に大木須を知ってもらうきっかけを作ることができた。
５．事業の成果と今後の課題	①ビオトープ作りの成果は、蛍の生息しやすい環境が広がり、景観が向上することで、大木須の魅力度が上昇している点である。課題としては、ビオトープを維持する人手が足りていないことや、古民家前のビオトープに釣るだけでは捕りきれないほどの量のザリガニが発生していることが挙げられる。 ②「ほたるの夕べ」の実施により、蛍を見に地域外から人々が訪れ、地元住民同士のみならず、地域内外で交流が生まれ、地域の活性化につながった。 ③学生がそばの収穫・脱穀作業を手伝うことで、不足した労力を補い、大木須の特産物であるそばを生産することができた。本年度はそばの幹がなぎ倒されてしまっていたので、防止策を学ぶ必要がある。 ④ 蜜源植物の植栽を手伝うことが養蜂業の援助へとつながり、さらに大木

	須地域の活性化をもたらしている。また、学園祭での蜂蜜の販売により、養蜂業で地域おこしを試みている大木須に対し還元できる情報を多く得られた。具体的には、異なる種類のセットでの販売が人気であるということや、デザインが購入の決め手の一つとして重要であることが分かった。さらに、課題としては価格が安すぎるとの声もあり、検討する必要があるという点が挙がった。これらの情報は、学園祭後報告会を開催し、地元に伝達した。 ⑤ 私たちは、蜜蝋製品を複数試作した。まず、食品を乾燥から守るために用いる「蜜蝋ラップ」は、蜜蝋のにおいが残ってしまい、食品に匂いが移ってしまう可能性もあったため、商品化は保留とした。匂いは蜜蝋を精製する際に生じるものであることが明らかになった点は成果であった。次に、蜜蝋ハンドクリーム・リップを製作し、アロマオイルを用いて蜜蝋の匂いは抑えることができたが、薬事法の関係で販売を断念した。最後に、学園祭で販売の叶った蜜蝋キャンドルを試作した。古民家おおぎすの情報やサークルのSNSアカウントQRコードの載ったカードを同封したキャンドルを販売したことにより、人々の間に大木須をさらに広めることができた。販売後に浮上した課題は、蜜蝋の精製を地元に頼り切っていることや、蜜蝋についた匂いが原因で、活用方法が限られていたことなどがある。来年度からは、蜜蝋の精製の工程から関わり、匂いの改善を目指したいと考えている。 以上のように、地元の景観の向上や農作業を手伝ったり、地元の行事に参加したりする中で、地域の方々と関係を築き、地域外にいるからこそ抱ける視点で大木須の魅力を再発見し、地域おこしのためにできることを考えられるという点が、このサークルのもたらす成果である。

（注）１．記述が枠内に収まらない場合は、枠を拡大してください。
２．事業内容がわかるような資料や写真などがあれば添付してください。
報告書（添付書類を含む）はＡ４判５枚以内にまとめてください。
３．この報告書は、各関係機関等に公表するともに、大学コンソーシアムとちぎのホームページへの掲載を考えております。また、次年度以降の学生活動支援事業に役立てていきたいと思います。